

スキルの獲得と活用

加納 篤
中山 信之
笹谷 真理子

1 聞き合いとテーマとのかかわり

これまでも多くの小学校では、子どもの話し合いの中で教科のねらいを達成しようとしてきたのではないだろうか。しかし、新学習指導要領では、どの教科においても言語活動を通じて教科のねらいに達成できるよう工夫することが、新たに求められた。従来の話し合い活動では不十分であるとするなら、それは、言い合いの傾向が強く、聞き合う姿が弱かったからではないか。だとすれば、なぜ聞き合う姿が弱かったのか。きっと聞き合いのためのスキルが、子どものものになっていなかったからに違いない。

そこで本グループでは、単なる言い合いではない、聞き合いのある話し合いを実現していくには、子どもにどんなスキルが身に付いていけばよいか、という切り口から考察することにした。

2 聞き合いのための手だて

集団で聞き合い、集団で学んでいくために、子ども一人一人に身に付けさせたいスキルという観点から、次の三つを考えた。

(1) 説明・理解のための共通語彙の獲得

集団で思考する場合、説明するにしても理解するにしても基本的な用語についての共通理解がなければ、話はかみ合わない。そこで、「説明・理解のための共通語彙の獲得」を第1のスキルと考える。各教科において、また各時間において、説明・理解のための共通語彙をクラス全員に共有させてから話し合わせることで、聞き合いにつながると考える。もし、話し合われている言葉の中に共通理解されていない言葉があるために、聞き合いが阻害されていれば、その時は確認を促し子どもに共有させる。

以下に、後述する実践例に取り上げた教科について、使用頻度が高いと思われるものを列挙するが、これらは、子どもの実態や扱う単元によって異なるものもあるので、あくまでも例として考えていただきたい。

理科：予想・仮説・対照実験・考察・発芽・風向き・質量・植物・空気・溶ける・気体…

体育：踏み切り・軸足・逆手・インターバル・オフェンス・リズムカル・コツ…

国語：主語・文・登場人物・根拠・結論・問いの文・部首・表現技法・5W1H・詳しく

音楽：強弱・メロディー・ハーモニー・リズム・速さ・フレーズ・音色・和音・イメージ

(2) アクティヴリスニングの習得と活用

単なるうなずきだけではなく、話し手がもっと話したくなるような反応を返す聞き方ができれば、話し合いはより活発になり、聞き合いへとつながっていくだろう。そこで、「アクティヴリスニング」を第2のスキルと考える。

例えば、電話で話すとき、相手の表情が見えない分、無意識のうちに声で表情を返している。それを、意識的に、見えている相手に、まるで自分と回線がつながっているかのように返すのだ。このような積極的傾聴を「アクティヴリスニング」と定義する。

ただし、本校のアクティヴリスニングには、発言が不明なときに、「例えばどんなことですか？」と質問したり、「あなたが言いたかったことは～ということですか？」と簡潔に言い換えたりすることによって、発言者の主旨を明確にすることも含める。このような聞き方ができれば、話し合いは課題解決に向けて集団で思考する聞き合いへと高まっていくと考える。

(3) 集団思考を促す視点の共有

子どもが主体的に話し合う中で教科のねらいを達成させるとき、この学習集団がいくつかの視点を共有していれば、話し合いそのものを対象化してとらえ、聞き合いへと高めていけ

るだろう。そこで、「集団思考を促す視点の共有」を第3のスキルと考える。

例えば、「説得力のある説明には根拠が必要だ」という認識が学習集団に共有されていれば、話し手は根拠を明確にして発言しようとするだろうし、聞き手は、根拠は何かと意識して聞くだろう。「目的にかなった方法を選択するべきだ」ということを知っていれば、今行っている話し合いが、目的達成に向けた話し合いになっているか、客観的にとらえ直すことができるだろう。このように話し合いに関わる視点を「集団思考を促す視点」と定義する。

「根拠」「目的」「方法」の他にも、「具体化」「比較」「関係づけ」などと書いたカードを用意し、子どもの発言をタイムリーにとらえ、例えば、今の発言は「具体化」したのだと、実感を伴った理解を促し、学級全体に共有させていく。

また、集団思考を促す視点が共有されれば、「話題が逸れていませんか。元に戻しましょう。」「先に班で話し合う時間をとりませんか。」「まず、原因を分類してから、解決策を考えませんか。」などの、話し合いそのものを対象化して提案する発言となって表れる。このような発言が生まれれば、子どもの主体性に話し合いを任せていても、課題解決に向けての聞き合いになっていくと考える。

3 実践例

(1) 説明・理解のための共通語彙の獲得

① 理科5年「植物の発芽と成長」の実践

理科の教科開きの際に、「なぜだろう」「どうなるのだろう」という疑問を持つこと、その疑問に対して自分なりに「予想」すること、そして「実験」や「観察」を通して実際に確かめてみる事が大切であると説いた。さらに、この単元に入って「発芽」「条件」「対照実験」について共通理解した上で、子ども達に＜植物の発芽には何が必要か＞について話し合わせた。学級全体で予想した後、どんな「対照実験」を行えば、それが必要かどうかははっきりするか班毎に考え、実際に実験して分かったことを発表させた(写真1)。

どの班も自分たちの行った「対照実験」について、実物投影機を使って発表した。その実験をしていない他の班の子どもに、どこまで分かりやすく発表できるか心配されたが、説明に用いられる言葉が共通語彙だったので、教師が解説するのと同程度に理解していた(資料1)。

② 体育科5年「50m走」の実践

体育でも考えるときは、やはり言葉である。「50m走」の単元で雨が降った時、体育館で＜速く走るための「コツ」を見つけよう＞という課題で話し合った。

この話し合いで必要となる共通語彙は「コツ」である。速く走れる子とそうでない子の差は、決して遺伝的なものだけのせいではなく、速く走るための「コツ」を使っているかどうかの差であることを、まず確認した。そうすることで、端からあきらめていた子どもも、意欲を持って聞き合いに参加するだろうと考えた。



写真1 班毎に行った対照実験の結果の発表

〈種の発芽の必要条件〉

種が発芽する時の条件は、私は三つだと思う。

空気と水、適度な温度だと思う。土は、あった方がいいが、なくても育つと思う。発芽して大きく育つなら土も必要だけど、発芽するだけなら土はいらない。明日、また家でも実験しようと思う。結果がなぜか早く知りたい。一日で発芽してくれないかな～なんて思っている。

資料1 班毎に行った発表のふり返り
(文中の～線は筆者 以下同じ)

〈ハードル〉

今日はハードルできたえました。高～く足をあげる事と、手をはやく動かす事がコツでした。うまい人を見ると、手をはやく動かしています。そして、この手の動かし方が50m走につながります。

もっと練習しなきゃと言う気持ちが出てきて、休み時間にやってみたいです

資料2 速く走るコツ

間隔を狭くして置いてある低いハードルを、一つ一つまたいで走らせると、速く通過できる子とそうでない子に明らかな差が出た。速い子どもに見本として走らせ、どうして速く走れるのか考え合った。気付いたことはその都度、実際に試行し体感させた。実際の動きと共通語彙が、気付きを促した授業だった(資料2)。

(2) アクティヴリスニングの習得と活用

① 学級活動5年「もっといいクラスにしよう」の実践

聞く力の弱い自分たちのクラスをどうしたらよいか。それにはアクティヴリスニングが有効だと紹介した。子どもからは「アクティヴリスニングって何？」と質問された。「相手

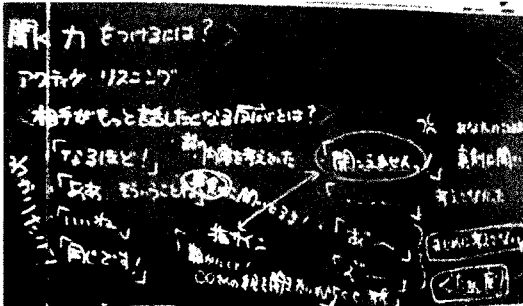


写真2 相手をもっと話したくなる反応とは

がもっと話したくなるような反応を返しながら聞くことだよ。」と説明すると、半信半疑な様子。そこで、「相手をもっと話したくなるような反応ってどんなことだろう？」と投げかけた(写真2)。自分が発言していて嬉しかった反応を列挙した後、それがどうして嬉しかったのかを考えた。そこには「あなたの話を真剣に聞いているよ」「わかりたいと思っているよ」というメッセージが含まれているからだ気づいた。逆に、自分が発言していて嫌だった反応を列挙すると、そこには意図した

思いやりを持って聞こう ～アクティヴリスニング～

- 一. 単なるうなずきではなく、話し手をもっと話したくなるような反応を返そう！
- 二. 話し手が自信をなくしたり、嫌な気持ちになったりするような言葉は×
- 三. 話し手のいいところを見つけよう！
- 四. よく分からないときでも、分かっていく気持ちさえあれば、反応は返せるはず！

【質問型】：それは、例えばどんなことですか？(例を挙げてもらえば分かるかも！)

【確認型】：〇〇さんが言いたかったことは、～なことではないですか？
(短く言い換えれば、みんなも分かるかも！)

- 五. 聞いたことは、自分の発言に生かそう！

つなげて…〇〇さんが言っていたように、私も…

△△さんの～のところには反対で、僕は…

□□さんに付け加えて、…

☆☆さんの意見で気づいたんですが…

／しないに関わらず、「あなたのことは大事に思っていない」「真面目に考えていませんでした」というメッセージが含まれてしまうことに気づいた。「アクティヴリスニングには思いやりが必要なんだね。」と確認した後、プリントを提示した(資料3)。このプリントは拡大印刷して教室掲示し、以降の授業で度々確認している。

資料3 アクティヴリスニングとは

No.5		せぞう		
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい
あいつ	うん			はい

資料4 オリジナルな反応集め

② 総合5年「集めよう 素敵な反応」の実践

単なるうなずきではなく、話し手をもっと話したくなるような反応には、どんなものが考えられるか、子どもに話し合わせた。「あーん」と「いいねえ」を組み合わせた「あいコンボ」や「なるほど」と「確かに」で「なたコンボ」など、子どもは楽しそうにオリジナルのうなずきを考え、聞き合っていた(資料4)。初めはぎこちなかった反応も、今では無意識に反応している子どもが増えてきた。

③ 国語科5年「のどがかわいた」の実践

主人公のイタマルは水を飲むとき空想の世界に耽るのだが、この空想の世界は叙述のどこからどこまでかについて、アクティヴリスニングを意識して話し合った。「“目をとじる”からだと思います。」「確かにこの文はあやしいけど、“目をとじる”は蛇口の前でした行動だから、違うと思います。」「ああん。」「映画みたいに」からだと思います。」「でも、

砂漠に映画館はないよ。」「映画館じゃなくて、頭の中に映った空想の世界ねん。」「えっ、そしたら“また起きあがる自分のすがた”を見ているイタマルはどこにいるの？」と、この話し合いは盛り上がり、時間内に終えることができなかつた。それは、「相手がもっと話したくなるような反応」ができたからだと考えている（資料5）。

今日の国語は、すごく楽しかった。正反対の意見を持ち、意見を考え・言われの繰り返しだった。「考える」って楽しい!とよく思った。
発言すると、スーッと風の吹いたようにきれいにモヤットが消える。そういうことがある。本気になれば授業も楽しい。

(3) 集団思考を促す視点の共有

国語科5年「敬語」の実践

子どもに話し合いを任せたこの授業では教師の支援として、集団思考を促す視点を端的に示したカードを、黒板に掲示した(写真3)。「話題」「根拠」「時間」「伝えたい気持ち」「わかりたい気持ち」「一人で」「ペアで」「班で」「みんなで」「方法」「目的」である。これは、実際に子どもの次のような発言を生む支援になったと思われる。(司会の子どもが)「どこをどんな表現にしたらいいか、根拠も併せて言ってください。」(司会ではない子どもが)「提案なんですけど、何分か班で相談した方がいいと思います。」「今は敬語が話題だから…」「もう一度お願いします。」



写真3 集団思考を促す視点の掲示

また、黒板の隅に45分の物差しを描き、矢印カードをずらしていくことで残り時間を視覚化した。すると、「3分たったのですが、まだ時間の要る人？」や「時間がないので次の問題に進みませんか？」など、時間を意識しながら聞き合っている発言が見られた。

3 成果と課題

説明・理解のための語彙が共有できていた時は、話す側も聞く側も学習集団として、ずれることなく考えることができた。アクティヴリスニングができていた学習では、ますます活発な意見交流ができた。4月当初、男女ペアの学習活動に照れを感じ、意図した活動ができなかったことを考えると、今は男女の別なく嬉々として一緒に活動していることも、アクティヴリスニングの効果だと考えている。

また、集団思考を促す視点を共有させてきたことで、子ども達の自主的な話し合いが、少しずつではあるが聞き合いになってきている。この集団思考を促す視点は、授業の枠を超え、運動会の応援練習の場でも見られた。応援団リーダーだったA児の作文からは、「相手の立場になって考える」「目的にかなった方法を選択するべきだ」「分かりやすく伝える」などの集団思考を促す視点が、A児のものになっていることがうかがえる(資料6)。

課題として挙げられることは、自主的な子どもの聞き合いに、教師がどう関わっていくかである。必要な共通語彙を確認したり、アクティヴリスニングを促したり、集団思考を促す視点に気付いたりすることも、できれば子ども自身ができるようになってほしい。しかし、成長の過程であるにとらえれば、教師が支援する必要がある。子どもの様子を見取り、必要の有無を見極めることが大切である。

〈恥ずかしいけど、勇気を出して〉
赤組の応援練習でした。6～4年は知っている。3年はなんとなく感じて、2年は不安。1年はさっぱり「ふりつけが分かんないんだ」と思った。けど、「私がするからマネして！」なんて言える勇気がなかった。でも、だんだん、何のために私は応援団になったのかと思うと、声が出た。
私は、言葉で人間はコミュニケーションをとらないと分らないと、あらためて思った。伝えるべきことを、はっきり言葉で伝えるようにしたいと思った。

資料6 A児の応援練習のふりかえり